
ナガレコ ミズノコ

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナガレコ ミズノコ

【Nコード】

N0872H

【作者名】

久芳

【あらすじ】

荒れ狂う川の流れに飲み込まれていたスイ子は、シンに助け出され、一命をとりとめた。山奥の村に住んでいたスイ子は、山神が倒れ、大雨で崩れそうになる山をシンに助けながら下っていく。村に残りたい気持ちと、離れるべきだというシンの言葉との狭間でゆれる中、スイ子は自分が、決して村には戻れない子供だということを思い出していく。

「しっかりしろ！」

荒れ狂う川の流れから、スイ子は引き上げられた。

「スイ子、起きろ！ スイ子」

朦朧とした意識の中、スイ子は呼びかけに応じるかのように、飲み込んでいた水を吐き出す。かすかに漏らした声に安心したのか、彼はほっと安堵の息をついた。

何度も名前を呼ばれて、スイ子の頭が次第にはっきりとしてくる。降りしきる雨にうたれ、川に流され冷えた身体を、彼は抱きしめてあたためてくれた。

「……シンちゃん？」

もやがかかったように定まらない視界の中。スイ子は自分を助けてくれた少年に、ふるえる手を伸ばした。

あちこち傷だらけで、擦り傷が痛々しいスイ子の手を、彼 シンはやさしく握り返してくれる。水かさの増した川の流れが、どうと耳に響いてまるで地響きのようだった。

「動けるか？ こそも早く離れないと、危ないんだ」

ふらつく身体を起こしながら、シンはスイ子に言う。彼もスイ子と変わらず十ほどの齡であるはずなのに、話し方や立ち居振る舞いは凜として隙がなかった。

黒い瞳がすこし青みがかっていて、涼しげな目じりが小生意気な印象を与える。ずぶ濡れで髪が顔に張り付いた姿は、水が嫌いで身を縮める猫にすこし似ていた。

「この山はもう長くない。早く降りよう」

「うん……」

手を引かれ立ち上がるも、スイ子は身体に力がはいらなかった。シンに手を引かれればまだしっかり歩けるけど、この状況の中、いつまでも仲良く手をつないでいられるわけがない。

スイ子が両の足で立てることを確認したシンは、赤い手ぬぐいを取り出し、それで互いの手首をしっかりと結んだ。

「おれから絶対離れるなよ」

「うん」

緊張した面持ちでこくりとうなずいたスイ子に、彼は気を紛らわせるように微笑みかける。それもふと視線をそらせば、唇を引き締めた警戒心の強い表情へと戻っていた。

シンに引かれるまま、スイ子は雨にうたれながら、山を下りだした。

山が今にも崩れようとしていた。

山の神が倒れようとしていた。

スイ子の住む村は、木々が深く生い茂る山の中にあつた。

山のふもとまで流れる大きな川で生活を潤す、小さいながらも豊かな村だった。山の神に作物の豊作を願い、村人の健康を願い、みなで助け合って暮らす生活を昔から続けてきた、長く歴史のある村だった、

その村や山が、数年ほど前からすこしずつおかしくなり始めていた。

作物の不作に始まり、地震や地割れが相次ぐようになった。長雨が続く、獣の数が減った。病に倒れる村人の数も増えた。

山の神の様子がおかしいのだと、人々はすぐに気づいた。

そこで村を去った者もいれば、いずれ良くなると留まる者もいた。スイ子は親が留まるからそれに従っただけ。シンも含め、子供たちはみんな家族と一緒に住んでいるのだから、共に残るのは当然のこ

とだった。

「すこし、休むか？」

「うっん、大丈夫」

スイ子がぬかるんだ道に足をとられると、シンが氣遣うように振り向いた。

「時間がないんだ。早くしないと、鉄砲水が来る」

「……うん」

長雨のせいで川は増水し、今にも決壊しそうになっていた。流れの強いあの川から生きてあがれたことが、いまさらながら幸運だとスイ子は思う。

歩きたびに足が濡れ、自分が水たまりの上を歩いているのか、それとも川を渡っているのかですらよくわからなくなる。それでもシンのすすむ道を信じて、スイ子は歩き続けていた。

この山を下るには、大人の足でもかなりの時間がかかる。子供がどんなに急いだところで、時間はたいして変わらない。それをわかっていてもなお、シンは歩みを止めようとしなかった。

山を下る林道があるのは、スイ子も知っていた。舗装がされ、その道を使えば足取りもだいぶん楽になる。けれどシンはその道を使わず、獣道ばかりを選んでいった。

「……だめだ。もつと奥に行こう」

林道に近づき、そこでスイ子たちと同様逃げる村人を見れば、姿を隠すために山の奥へと道を変える。たしかに道は川の近くにあり、決壊したときに危険であるから、遠ざかるべきではあった。

「その足、痛いだろ」

「……うん」

長く歩き続けているため、足にはいくつもまめができ、つぶれていた。川の水と雨とでずぶぬれになった服は、重くはりついてうまく動けない。

空のように淡い水色だったはずの着物は、泥水と血とで鼠色にも似た薄汚れた色に変わってしまった。あごの高さにそろえて切った髪からは雨水が滴り、小枝や枯葉が引っかかったままだ。

ふと見れば、シンもスイ子と似たような色の服を着ていた。傷が少ないぶんまだ綺麗な空色をしているけど、なぜその服を持っているのか、スイ子は疑問に思う。

「おぶるか？」

「いい」

枝にひっかけてできた傷は、シンも同じだった。スイ子と違って、手首足首にすり傷はない。息もさほど切れていないようで、生い茂る木々を掻き分け道を作っていた。

「あたし、村に戻りたい」

「だめだ」

「だって、お父さんとお母さんが！」

両親はきつと、村に残っているに違いない。川が決壊したら、村は間違いないく飲み込まれてしまうだろう。

「今戻れば、スイ子も危ないんだ！」

つないだ手首を引っ張るスイ子に、シンは声を荒げた。

「もしかしたら、スイ子の家族も山をおりはじめているかもしれない。運がよければふもとで会える。村に戻る時間はないんだ……と、大丈夫か」

足をからませ転んだスイ子を、シンが抱きとめた。

「休むか」

苦しげに肩で息をつくスイ子に、シンは問うた。けれど決して、手ぬぐいをほどこうとはしない。

互いの命をつなぐ赤い布が、まるで手かせのようにも思える。スイ子は唇を噛みながらも、頭をふり、山を降りると足を踏み出した。

「……ごめんな」

無言で山を降りるスイ子の目に、涙がたまっている。それに気づいたシンが、ややためらうそぶりを見せながらも、呟いた。

「村に戻りたいっていう、スイ子の気持ちはわかるんだ。でもおれ、スイ子には生きて山を降りてほしいんだよ」

「あたしが、『流れ子』だから？」

「……別に、それだけじゃ」

言いよどみながらも、シンは肯定した。

流れ子。それはスイ子たちの村で代々受け継がれている少女のことだった。

村を流れる大きな川は、山の神の化身であるといわれていた。豊作を願う祭りや、年末年始の儀式など、神を祀る祭典はかならず川のそばで行われた。そして川に供え物をささげたり、祝詞とともに舞を踊るのが流れ子の役目とされていた。

流れ子とは、ほかの子となんら変わりない、普通の童女だった。先代の流れ子が初潮をむかえたとき、次の年の一番初めに生まれた女の子が次の流れ子になると定められている。祭りのときに祝詞をうたうのは長とされていて、付き人もたくさんいる。祭事とき以外は流れ子も、ただの村の子供として育てられる。

スイ子はその流れ子だった。身にまとう空色の水干は、流れ子だ

けが着ることを許される受け継がれた衣だった。

流れ子に選ばれるのは名誉なことだった。代々流れ子になった娘たちは、大人になればたくさんの子供を産み、村の繁栄をも産むと喜ばれる存在だったからだ。

「流れ子じゃなかったら、助けなかった？」

「まさか！ おれは誰が溺れてても助けたさ！」

「じゃあどうして、村のみんなを助けに戻らないの！？」

突然あがったスイ子の金切り声に、シンが驚き足を止めた。

「今から村に戻って、みんなに知らせようよ！ 危ないから逃げようって、言いに行こうよ！」

村のみんなを置き去りにしたという罪の意識が、スイ子の頭の中でどす黒く渦巻いていた。

半ば睨むように見上げられ、さほど背丈の変わらないシンは、ひるんだように後ずさる。赤くつながれた手の先で、彼は言葉に迷うように瞳を泳がせた。

「……今から戻ったんじゃ、おれたちだって逃げられなくなるかもしれないだろ」

「でも、あたしたちだけ逃げるなんて……山が崩れるかだって、本当に決まったわけじゃないんでしょ？ 山神様が、きっと守ってくれるよ！」

「……山神様？」

スイ子の言葉に、シンは眉根をきつく寄せた。

「山神様はいつも、村を守ってきたんでしょ？ 長様が言ったもん、嵐が来ても雪が深く積もっても、山神様がいつも守ってくれたんだって！」

「スイ子までみんなと同じことを言うな！」

怒鳴られ、スイ子はびくりと身をすくめた。

「そりや今まで、山神様が守ってくれたかもしれない！ でも、山神様だっていつまでもいてくれるわけじゃないんだ！ いつまでも生きられるわけないだろ！」

「……でも、山神様に寿命が来ても、ちゃんと新しい山神様が生まれるんでしょ？」

それは村の誰もが、長から聞かされて育った話だった。

山の神様には寿命があり、長い年月の間に一度、世代交代がある。今の長の爺の爺の爺の爺の代にあつたのが、一番新しい世代交代だといわれている。そのときも今のように山が荒れ村が危なくなつたけれど、新しい神様がちゃんと山と村とを元に戻してくれたのだった。

だから、今回も大丈夫だ。長はそう言っていた。山神の交代は昔から何度も繰り返され、そのたびに山は生まれ変わり、村も繁栄を続けていた。村のみんなはそれを信じ、スイ子の親もそれを信じ、山を降りたのはごくわずかな者だけだった。

「村は山神様の加護があるんだよ？ 下手に動いたあたしたちのほうに危ないかもしれないよ？ シンちゃん、戻ろうよ」

「……だめだ」

「じゃあ、あたしだけ戻るから。この手ほどいてよ」

固く締められた結び目は、スイ子の力ではとうていほどけそうになかった。怒鳴られた恐怖に目に涙を浮かべながらも、スイ子はシンの瞳を見上げた。

「シンちゃんだけ、降りてよ」

「戻ったら、死ぬかもしれないんだぞ？」

「……あたし、お母さんたちとはなれることのほうがこわいよ」
髪を伝う雨が、頬を流れる。それにスイ子の涙が加わった。

「こわいよ。あたし、村から出たことなんてないもん。なにがあるかわからないもん」

「……スイ子」

泣き出したスイ子に、シンの瞳が揺れる。結びつないだ手を力なく下げ、声を荒げてしまいそうになるのをのどの奥でぐっところえていた。

「村が、好きか？」

「……うん」

うなずくと、シンは「そうか」と呟いた。

スイ子は村で生まれて、一度も外に出たことがなかった。狭くて小さな村だけど、家族も友達もいる、あたたかい村だった。

森ではたくさんの甘い果物がとれて、父がよく狩りに行っていた。母が畑を耕すのを手伝った。近所の兄友達たちと、川で魚を釣りに行った。

豊かな山があるからこそ、豊かな村があった。そんな村を離れることなど、スイ子にはできない。

村には親がいる。友達がいる。長がいる。そして、シンが……

「戻っても、受け入れてなんてもらえないよ」

思いの渦巻くスイ子の頭が、シンの落ち着いた声に呼び戻された。

スイ子の頬についた泥をぬぐいながら、シンはぼつりぼつりと呟く。少女のように細い声は、叩きつける雨の中でも不思議とよく聞こえた。

「降りるしかないんだよ。村には戻れない」

足元を流れてゆく水は、はたして雨のものなのか、それとも山を飲み込もうとしている川のものなのか。小刻みに揺れる大地に、スイ子は山の叫びを聞いたような気がした。

山の神が、倒れる。

見たこともない。会ったこともない。ただ空を見上げ、川に供え物を流していただけの空想の神を。悲しくも最期のときを迎える今、すこしだけ感じた気がした。

「行こう、スイ子」

つながれた手を引かれ、スイ子は抵抗もなく、だまって後に続いた。

「戻っても、おれたちのいる場所に残されてないんだ」

「シンちゃん……」

今頼るべきは、シンしかない。

これからの道を歩むには、この赤い布を決して離してはいけ
ない。結び合わせた手をつなごうと、スイ子が指先を動かしたとき。大
地が激しく揺れた。

「なに……？」

地震かとも思ったけど、違う。山を獣の群れが駆け下りてくるよ
うな、そんな地響きと轟音が迫ってきている。

「川が！」

川が決壊した。遠い木々が濁流に飲み込まれるのを見て、シンが
スイ子を抱き上げた。

ぬかるんだ土を踏みしめて走るけれど、迫る川にはとても逃げら
れそうにない。林道はすでに飲み込まれてしまっているだろう。山
の奥へと逃げたシンの判断は正しかった。

「シンちゃん……！」

シンの濡れた肩越しに、スイ子は迫りくる濁流を目にする。木々
を飲み込み、岩にぶつかっては身を散り散りにし、それでもなお追
ってくる。まるで川が生きているようだった。

「スイ子は生きるんだ！」

かすれた声で、シンは叫んだ。

「生きて、もう一度……！」

吐く息が尽きた。

叫びは濁流もろとも、神の化身であるはずの川に飲み込まれてい
った。

渦を巻くかのようにいくつもの流れが交差する川の中で、スイ子

は身体がばらばらになるのではないかと思った。

自分が川の底に向かっていているのか、それとも水面に上がろうとしているのか。土砂でにこった川では、視界も何もあったものではない。まるで鞠を転がすかのように、スイ子の身体は川の中でころげまわっていた。

息ができるわけもなく、苦しさに目がかすんでゆく。その中で、手首にまいた赤い布だけが、はつきりと見えていた。

結び目は依然、固いままだ。シンはこの手の先にいる。安堵している場合ではない。一緒に流されているシンの身も危ない。

手首にきつく食い込む赤い布。

荒れ狂う川の流れ。

これをスイ子は、前にも見たことがある。

両手両足をきつくしばられて、身動きが取れないまま、川の流れに翻弄されて

『 スイ子 』

長の声に、スイ子は顔をあげた。

『これは、流れ子の定めだと思いなさい』

やむことのない雨は、スイ子の涙をも流し、流れ子の衣を色濃く変えていた。直立不動で動かないスイ子の肩に、長はそのしわだらけで節くれだった手を乗せた。

『山の神を鎮めることができるのは、流れ子だけなんだ。他の誰にも、同じことはできない』

スイ子は長の胸で泣きたかった。けれど身体が動かなかった。赤い布できつく、手と足を縛られていたからだった。

『山神様を鎮めなさい、スイ子 』

背を押され、スイ子は泣き叫ぶ母の声を聞いた気がした。

身動きも取れぬまま、ごうごうを渦を巻く川へと吸い込まれてゆく。抵抗することもできず、山神に身をささげた。

流れ子の定めだった。

過去、山神に異変がおき、山の気候が乱れたとき。ひどい干ばつや嵐がおそったとき。代々流れ子の身は、人柱として山神にささげられた。もとはそのために、流れ子という娘がもつけられていたのだった。

山神の交代のとき。すこしでも早く山の安泰を取り戻すために、人柱が使われるのは当然のことだった。

上も下も、自分がどんな姿をしているのかもわからないほど川の流れに翻弄され、スイ子は苦しみもだえていた。

手足を縛るのは、自力で泳いで岸にたどり着かないようにするためだ。川の中で落とした命は、山神にささげられる。自分の命が村を救うのだとわかっていても、スイ子に死は恐怖でしかなかった。肺の息はとうに川に吸いだされ、流れのいたずらなのか、手首の緊縛はほだけかけていた。どうにか手の戒めから逃れ、スイ子はがむしゃらに手を伸ばした。

『スイ子！』

その手に、誰かが触れた。

赤く漂う布の先で、誰かがスイ子の手をつかんだ。川の水に溶け込み、冷たくなった身体に、その手のひらはとても熱かった。

スイ子を手繰り寄せ、しかと顔を見つめたその瞳は、青く光っていた。

『今、助ける』

川の流れの狭間から、少年があらわれた。

「スイ子！」

赤い布で結ばれた手を、シンが力強くつかんだ。流れの力にいつもぎ取られてしまっかわからない命綱に、彼は両の手をかけて引き寄せる。力の抜けた体をしっかりと抱きかかえ、スイ子にかるうじて意識があることを確認すると、彼は力強く水をかいた。

川の流れに翻弄されるわけでもなく、濁流の中でかつと見開かれた瞳は、そんなに青が強かっただろうか。

「スイ子！ あと少しだ！」

水の中だというのに、シンの声が良く響く。その声は、耳というより、頭に直接届くような不思議な声だった。

山のすべてをも飲み込もうとする川の流れは容赦なく襲い掛かってくるけれど、シンはそれをもろともせず、水面に顔を出した。

言葉にもならない咆哮をあげながら、彼は川岸へと戻る。スイ子を川岸へと押し上げ、続いて自分も川から這い上がった。

「スイ子、しっかりしろ！ スイ子！」

「……うっ」

四つんばいになり水を吐くスイ子に、彼はほっとしながら背をさすってくれた。顔にはりついた濡れ髪をかきあげ、自らも荒くなつた息を整えている。

「スイ子、大丈夫か……？」

やさしく気遣う声に、スイ子の頭が次第にはっきりとしてくる。思い出した。どうして自分が、川で流されていたのかを。

シンが助けてくれる前のことを。

「……あたし」

ようやく、彼の言っていた意味がわかった。

「あたし……」

自分にはもう、戻れる場所がない。

人柱として神にささげられたのに、生きている。神にささげられたはずの身で、生きて村に戻ることは、決して、できない。

「スイ子……」

怪我はないかとあちこちうかがってくるシンに、スイ子はこくりとうなづく。大丈夫、もうすべて、思い出した。

「……シンちゃん」

「なんだ？」

「シンちゃんは、だれ……？」

シンという少年は、村にはいない。

自分の身を危険にさらしてまで、人柱を助けようとする子供なんて、村にはいない。

シンちゃんと、なぜ自分は呼んでいたのだろう。思い出す前はとも身近な人だったはずなのに。今、スイ子には、彼が誰なのかまったくわからなかった。

「……そこまで、思い出しちゃったか」

眠りの狭間にいるかのような、ぼんやりとしたスイ子の表情に、シンは笑ってみせる。けれどその瞳は切なげにかげり、川の中で見たような青い輝きは消えていた。

「スイ子」

彼が口を開いたとき。ひととき大きな地響きが、横たわる身体を貫いた。

驚き身体を起こすと、ふらついた肩をシンが抱いてくれる。そして二人で空を　山の頂を見上げ、嘆いた。

「山が……」

「山神が倒れたんだ」

山頂から、黒煙がふきだしていた。

「行こう、スイ子。ここも危なくなる」

きのこのように空を覆ってゆく煙と、赤く燃えあがる山の最期の命を見て、スイ子は立ち上がるシンに続いた。

今から村に戻っても間に合わない。父と母と、もう二度と会えないと悟った。

「川に流されて、もうふもとまできてたんだ。もう少しで近くの村に行ける。がんばれ」

「……うん」

シンは、スイ子の流す涙を見ないでくれた。

自分を守ろうとしてくれる人と、つながれた手。その赤い布に導かれるまま、スイ子は歩みだした。

ふもとの村の形が見えてくるようになると、やはりそこでも、山の噴火で騒ぎになっているであろうことが、遠目でもわかった。

つないだ手をシンにひかれるまま、スイ子は歩き続けていた。村と家族を失った絶望感と、度重なる疲労で頭が虚ろとしていた。シンがいなかったら、スイ子は山の中でとうに倒れてしまっていただろう。

いや、シンがいなければ、スイ子は人柱としてささげられたときに、すでに命を落としたはずだった。スイ子は彼に、二度も三度も命を救われていた。

「……大丈夫だ、スイ子。山から逃げてきたって言うたら、みんな助けてくれるから」

スイ子の不安をまぎらわせようと、シンは微笑んでみせる。緩んだ頬のあどけなさは、いつの間にか消えてしまっていた。ちらりと見上げると、その瞳は再び、青く輝こうとしている。

end

「……人柱なんて、無意味だったんだ」

ふいに歩調を緩め、先を歩いていたシンはスイ子に並んだ。

「山神の寿命だったんだ」

ようやく、雨がやんだ。シンのおごからしたたるのは、髪に残った川の水だった。真一文字に引き締められた唇は、口の端がかすかに震えていた。

「人ひとりの命をささげたところで、山神の命が永らえるわけじゃない。今まで日照りや洪水のたびに村の娘の命をささげていたけど、あれだって、ただの無駄死にだったんだ」

村では誉れと言われた人柱の少女たち。彼女たちはスイ子のように川に捨てられ、無残に川の底を転がっていた。

「どんなにあがめても、山の神は村になにもしないんだ。人間は神にたよってばかりで、神ばかりを信じて……」

つながれた彼の手が、強くこぶしを握った。

「山神が死ぬというのに、人の命を捨てるだけで、逃げようともしない……」

「ごめんね、シンちゃん」

「スイ子があやまることじゃない」

空いたほうの手で、シンは乱暴に頭をかきむしった。

「違うんだ。こんなことを言いたいんじゃないんだ。おれは……」

言葉が続かないように、彼は口を閉ざしてしまふ。そして再び足を速め、スイ子の手を引いた。

「山の神は寿命を悟ったとき、次の神を産むんだ。そしてその神が、一人で山を統べられるようになったところに、ひっそりと命を消す。

でも今回は、神の子供が間に合わなかった……」

シンの足の早さに、スイ子は置いていかれそうになる。こけつまろびつなんとか足を運び、その背中に何も言えない自分の唇を噛ん

だ。

シンが立ち止まり、手ぬぐいをほどいたのは、村の入り口に差し掛かってからだった。

「行くんだ、スイ子」

「シンちゃんは？」

「おれは、山に戻らないと」

長く締め付けられていた手首に、血の気が戻る。人柱として流されるときについた傷よりも、ほどいたばかりの手首の痣のほうが赤黒く、食い込みも深かった。

「一緒にいて」

「それはできない」

「シンちゃん」

「おれはシンちゃんじゃない」

言う彼が、ひととき悲しそうな目をしていた。

「シンなんて子供は、いない」

スイ子を助ける、ほんのひと時の間。シンという名前を語り、少年の姿をした彼は、同じく痣のできた手首をそつと撫でた。

「……なあ、スイ子」

彼は青い瞳を細め、スイ子を見た。

「大きくなったら、あの山に、戻ってきてくれるか？」

その瞳は空の色のようであり、静かに燃え続ける炎のようでもあった。見たこともないはずの瞳がとても懐かしく感じられて、スイ子の目にまた、涙が浮かんた。

「戻る、絶対」

「そうか……」

村の繁栄を産む、流れ子。そう生まれてきたのならば、スイ子にもう一度、村を立て直す力があるに違いない。それが何十年も先の、気が遠くなるほどの話だとしても、スイ子はもう一度山に村を戻したかった。

山の神ばかりをあがめた村だったけれど。人の力ばかりを頼って

いた村だったけれど。

山の神が見捨てないのなら、もう一度、あの地に。
それを彼が望むのなら。

「それまでにおれ、山をしっかりと、統べるようにする」

「……うん」

スイ子がつなずき、顔をあげると、彼はもう背を向けていた。

これ以上立ち止まっていると、別れがたくなってしまふ。スイ子も、彼に背を向けた。

鈍く痛む手首をさすりながら、この痛みが偽物ではないと何度も確かめる。

この息の苦しさ。流れる涙。どんなに力が弱くなり、倒れそうになってもなお、力強く打ち続ける鼓動。

自分は今、生きている。

失うはずだった命を、生かされた。

「……シンちゃん」

振り向いたスイ子の目の先で、新代の神の小さな背中が、溶けるように消えていった。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0872h/>

ナガレコ ミズノコ

2010年10月8日15時17分発行